

地域的特性を活かしたサイエンスパブの開催 ～「サイエンスパブ in 福岡」の試み～

高妻 真次郎・山岡 均・島田 雅史

〈九州大学大学院理学府 〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1〉

e-mail: sci-pub@ursa.phys.kyushu-u.ac.jp, kouzuma@phys.kyushu-u.ac.jp

「サイエンスパブ in 福岡」は、2007年4月から活動を始め、約2年間で計7回のパブを開催した。目指したのは、地域的特性を活かして、従来のサイエンスカフェよりも気軽に密接的な対話の場を作り出すことである。本稿では、サイエンスパブの立ち上げから理念、開催までの手順、およびこれまでに行ってきたパブの様子について紹介する。

1. はじめに

博多、と聞いて、皆さんは何を思い浮かべるだろうか？ ラーメンや明太子、水たき、追い山、博多どんたく…。なかには、博多人形や博多織という人もいるかもしれない。博多には、実にさまざまな名物が存在する。だが、外せないものの一つに「屋台」がある。

日も傾き、空があざやかに赤く染まり始めるころ、博多の街に屋台が軒を連ねはじめる。夜にもなれば、どの屋台も活気づき、仕事帰りのサラリーマン、常連、若者など、まさに老若男女が集う。気の置けない仲間と飲む人もいれば、一人で飲んでいる姿もある。屋台の中では、見知らぬ者どうしでも、まるで昔からの知り合いだといわんばかりに会話している光景がよくみられる。その話題は、日常のささいな出来事から、仕事のグチ、スポーツ、政治や経済など、実にさまざま。お酒の助けもあってか口もなめらかに、実に楽しそうに、そして時に真剣に語り合っている。

屋台のような雰囲気の中で、星や宇宙について語れたらどんなに楽しいだろう。

それが、「サイエンスパブ in 福岡」のはじまりだった。

2. 立ち上げ

「サイエンスパブ in 福岡」は、2007年4月にその活動を始めた。2007年といえば、3月に「一家に1枚 宇宙図」*1が発行された年である。天文学についてもっと広く深く知ってもらうべく、われわれもサイエンスカフェのような形で、宇宙図を活用して普及活動を行おうと考えたのが発端といえる。

サイエンスカフェとは、カフェのような和やかな雰囲気の中で、科学の話題について気軽な双方向コミュニケーションをとることを目指した、科学の普及活動である。形式としては、30分ほどの短い講演とその後の質問コーナー的な対話・議論という流れが一般に多い。だが、この形では、参加者が主体となって双方向コミュニケーションをとることは難しい。そこでわれわれは、これまでの形式よりも参加者一人ひとりが気軽に、そして主体的に参加し、誰もが互いに密接な対話ができる場にすることを考えた。そのときに思い浮かんだものが、博多に古くから根づく「屋台」である。

福岡の屋台には、誰もが“他人”という垣根を越え初対面どうしでもさまざまな話題について気軽に対話する、という一種の市民性のようなもの

*1 <http://www.nao.ac.jp/study/uchuzu/index.html>

がある。屋台のような雰囲気の中でお酒を飲みながら語り合えば、その市民性が活かされ、誰もがより主体性を持ち、気軽にそして密接に対話できるのではないかと考えた。そこで、名前もサイエンスカフェではなく、「サイエンスパブ」とした。

“パブ”には、もう一つの意味を込めている。それは、“大人のための”天文学の普及の場にしたかったという点である。理科離れが叫ばれ、科学の普及に関するイベントが増えてきたが、その多くは子ども向けのものである。大人が科学に興味を持ち、それを政治や経済と同じように仲間と議論したり、子どもに話すことで、子ども向けの普及活動にはない波及効果によって、より広く浸透していくのではないかと考えている。

3. 方 針

「サイエンスパブ in 福岡」では、従来のサイエンスカフェとは形を変え、より気軽に密接的な対話の場を作り出すことを目指している。そのため、参加者全員の前で話すような講演などは一切せず、一貫した雑談形式をとる。つまり、時間帯だけを決め、あとは始まりから終わりまで一貫して個々人とのフリートークを楽しむ。なお、話のきっかけとして、宇宙図のパネルやラミネート加工したものを配置している。

これらを基本的な方針として固定し、開催方法や曜日、時間帯などの細かい形を変えていくことで、よりよい方向性を模索してきた。これまでにを行った開催方法は、以下の二つである。

・ 随時参加制

パブを催す時間帯だけを決め、参加者の出入りを自由にして進める。飲食代は、基本的に各自で注文した分のみを支払う。この場合には、申し込み制よりも時間をやや長め（2時間30分～3時間程度）にとることが多い。時間帯によっては参加者が集中する場合もあるが、そのときには早くか

ら参加していた人に呼びかけるなどして、入れ替えを促している。

・ 申し込み制

あらかじめ申し込み期限（開催日の約1週間前）を決めておき、電子メールでのみ申し込みを受け付ける。参加人数は、コミュニケーターが3～4名程度であることやお店の広さなどを考慮したうえで、30名を超えないくらいにしている。料理は、こちらで決める。当日は、始まりと終わりの時間を通知するのみで、あとは自由に会話を楽しむ。

われわれスタッフ（コミュニケーター）がやるべきことは、上記の二つの形式において、基本的には変わらない。おもな役割は、参加者どうしの話をつなげることである。また、参加者からの質問や疑問に答えたり、こちらから話題を提供したりもする。

4. 開催までに

開催には、当然それまでに準備が必要である。今でこそ手順が確立してきたが、始めた頃はまさに暗中模索で、試行錯誤の繰り返しだった。ここでは、開催までの準備について、その一部を紹介する。

準備はまず、お店探しから始まる。「サイエンスパブ in 福岡」では、開催する場所を毎回変える。場所を変えることで、参加者層がより分散し、さまざまな方の参加が見込めるからである。お店は、20～30名が入るくらいのスペースを持ち、話しやすい雰囲気か否かを基準に、候補をしぼる。直接お店にも足を運び、適当だと思えば責任者に趣旨を説明し、日程や値段なども含め交渉する。参加者へのハードルをできるだけ下げるため、値段の交渉にはいつも力を入れている。

お店が決まれば、次は宣伝である。まずチラシを作り、開催するお店やこれまでの開催店などに

*2 <http://ursa.phys.kyushu-u.ac.jp/sci-pub/>

表 1

回	開催日	時間帯	形式	参加人数
第 1 回	2007 年 4 月 18 日 (水)	18:00-20:00	随時参加制, 着席	約 15 名
第 2 回	2007 年 9 月 12 日 (水)	19:00-21:00	随時参加制, 着席	約 35 名
第 3 回	2007 年 11 月 21 日 (水)	18:00-20:00	申し込み制, 立食	29 名
第 4 回	2008 年 2 月 22 日 (金)	18:00-21:00	随時参加制, 着席・立食	約 30 名
第 5 回	2008 年 6 月 6 日 (金)	20:00-22:30	申し込み制, 立食	26 名
第 6 回	2008 年 11 月 16 日 (日)	19:00-21:00	申し込み制, 着席	18 名
第 7 回	2009 年 3 月 9 日 (月)	20:00-22:00	申し込み制, 立食	33 名

これまでに開催したパブ。第 1, 2 回目は、目安として終了時刻を定めていたが、実際には、終了しても 1 時間以上は続けていた。

置いてもらう。広報のための web ページ²も 2008 年 1 月に開設しているので、そこに情報をアップする。あとは、福岡市のさまざまな情報サイトにイベント情報を送り、掲載してもらう。パブ当日までは、チラシを肌身離さずもち歩き、機会があれば誰それ構わずとにかく（なかば強引に？）チラシを渡す。最後は、祈る。

パブを申し込み制にしているときは、申し込みメールへの対応をする。締め切り間際にメールがおし寄せ、対応に追われるのは、言うまでもない。参加者が決まれば、お店に連絡し、参加者層にあわせて料理などを決める（年齢層が高ければ料理を軽めに低ければ多めにする、女性が多ければ最後にデザートを入れる、など）。

随時参加制のときには、人数や参加者層などは当日にならないとわからない。開催している時間帯に、人が来るのを待つのみである。お店の利益ももちろんあるので、時間になっても人がなかなか現れないときは、毎回ひやひやする。幸い、これまでの開催では、1 時間もすればお店からあふれるくらいに人が集まった。この形式のメリットとしては、お店の常連や、パブがあると知らずにたまたまお店の前を通った人が飛び入りで参加することも可能だという点が挙げられる。

以上が、開催までのおおまかな流れである。

5. パブを開催して

2009 年 3 月までに、計 7 回のパブを催した（表 1）。曜日や時間帯も一定にせず、毎回変えている。幸いなことに、これまでのパブでは、いずれもお店が満員になるほどの人数が集まった。男女比も半々か女性のほうが多い傾向にあり、年齢層も 20～60 代と幅広く、2 名ないし 1 名での参加者が多かった。写真にも見られるように、毎回盛況で、初対面どうしでの会話も多い。また、コミュニケーターがおらずとも、会話が自然発生する光景が見られた。

時間帯や形式の違いでは、以下の傾向があった。

・時間帯

仕事が終わってからの参加が多いため、20 時以降の開始を希望する声があった。だが、早い時間に始めても、参加人数が大幅に減るということもなかった。

・着席・立食

着席スタイルのほうが、やはり話す相手が固定してしまう傾向にある。呼びかけても人の流れは悪く、いったん座ると腰がおもい。一方、立食の場合、料理やドリンクを取りにいくときに話し相手が変わることも多く、流動的にパブが進んだ。



写真1 サイエンスパブの様子(第3回).
初対面の参加者どうしが、入り混じって会話をしている。

・ 随時参加・申し込み

参加者の傾向として、随時参加制にしたほうが、より積極的にいろいろな相手と話そうとする傾向が見られた。

なお、第3回には天体搜索家の高尾 明氏、せんだい宇宙館の早水 勉氏、南阿蘇ルナ天文台の宮本孝志氏が、第4回には久万高原天体観測館の藤田康英氏が、コミュニケーターとして参加した。

参加者からの声としては、「好奇心が満たされた」、「続けてほしい」、「いろいろな人がいて楽しかった」といった好意的なものから、「会場が少し狭い」、「視覚的に楽しめるものがあるといい」という要望までさまざまなものがあった。

これまでに7回のパブを行ったが、課題や改善点もまだある。最も大きなものとしては、参加人数が多いとき、参加者が孤立している場面があったことだ。この点は、コミュニケーター側の対応と役割を改善することで、大人数にも対応できるようにしていく。また、話を引き出す場・雰囲気をもっとよくしていくことも重要な点である。

理想としては、コミュニケーターがおらずとも、

参加者どうしで会話が自然発生するような場になることである。そして屋台をはじめとした日常の飲み会の席で、パブの参加者がコミュニケーターのような役割をし、その話を聞いた人がまた別のの人に話をする…、といったことが連鎖していくようになれば、天文学も政治や経済と同じように日常的な話題の一つとなり、自然と天文学が浸透していくのではないかと期待している。

6. おひらき

手探り状態で始まったサイエンスパブも早いもので開始から2年近くが経ち、開催回数も7回を超えた。ここまで続けることができたのも、参加者からの「次はいつやるのか?」というプレッシャー(?)と、「楽しかった」とか「またやってほしい」という声があったからといえる。

最後に、もし「サイエンスパブ in 福岡」に参加したいという方がいれば、ぜひ筆者までご連絡いただければと思う。

Science Pub within a Local Culture

—An Attempt of “Science Pub in Fukuoka”—

Shinjiro KOUZUMA, Hitoshi YAMAOKA,

Masafumi SHIMADA

Graduate School of Sciences, Kyushu University,
Fukuoka 812-8581, Japan

Abstract: We have held “Science Pub in Fukuoka” seven times between Apr. 2007 and Mar. 2009. The purpose of our Science Pub is to provide citizens with a place that everybody can enjoy relaxed and intimate talking with each other. In our Science Pub, a local character in Fukuoka—“Yatai culture”— plays important role to achieve our purpose. We introduce the founding, idea, holding process, and atmosphere of our Science Pub.